

2011年5月13日 召天者記念礼拝メッセージ

聖書：創世記 50 章 1～14 節

説教題：カナンの地に葬る

1 先祖を大切にしない宗教？

私たちの教会では、毎年五月の第二週目の日曜日は召天者記念礼拝を行うこととしています。六年前に天に召され私たちの大先輩でもある中本亀子姉が桜が大好きだったので、それでこの時期に行くことに決めた経緯があります。私たちが、中本姉とお交わりできたのはほんの数年間だけでした。でも姉はいつもこう言っていたことばを今でも思い出します。「大丈夫。私たちは天国に行くのですよ。そのことを信じていきましょうね。」まるで子どものように何の疑いもなく信じて、私たちを励ましてくださいました。

人はいつか必ず死にます。後に残された者たちは、亡くなった方をいろいろなかたちで葬ってまいります。仏式による葬儀であれば葬儀の後もたとえば四十九日法要があったり、十三回忌法要があったり、お盆やお彼岸になればお墓参りをしたりもします。一方キリスト教では葬儀はしますが、その後何をするか決まり事があるわけではありません。

ある方は言います。「日本には昔から先祖を大切にするというすばらしい文化がある。けれども、キリスト教は先祖を大切にしようとしません。」

ほんとうでしょうか。もしキリスト教が先祖を大切にするというのなら、それはどういう意味でそうするのか。仏教とはどこが違うのか。きょうはその事を見て参ります。

2 父ヤコブの遺言「先祖たちといっしょに葬ってくれ」

ヨセフはもともとイスラエルの人でしたが、若いときに兄弟に恨まれてエジプトに奴隷として売られてしまいます。その後、彼はエジプトでいろいろな苦勞を重ね、時には牢獄に投げ込まれたこともありましたが、エジプト政府の要人に上り詰めました。

ヨセフの父であるヤコブは、長い間ヨセフを死んだものと思いついていました。でも、神がこの一家に働いてくださり、劇的とも思える方法で父親はエジプトで息子のヨセフと再会することになりました。

そのヤコブも高齢となり、地上の生涯を終えるときが来ます。ヤコブはヨセフにこんな遺言を託します。「私は私の民に加えられようとしている。私をヘテ人エフロンの畑地にあるほら穴に、私の先祖たちといっしょに葬ってくれ。」(創世記 49 章 29 節)

その遺言に従ってヨセフは、自分の上司であるパロに伺って休暇をいただき、故郷に帰省し、父を葬ることに致しました。その葬儀はかなり盛大なものであったようです。

さて、ここで考えなければならないことがひとつあります。ヤコブはどうしてヘテ人エフロンの畑地にあるほら穴に葬るようにと遺言したのか。

遺言と言えば、有名な会社の経営者や、有名な芸能人が亡くなったりした後、遺族の間で財産の分け方で裁判沙汰になったということを知ることがあります。財産のこともそ

うですが、葬儀のやり方や、お墓のことで家族同士がもめることもあるそうです。ですからそんなことにならないよう、あらかじめ遺言を残しておいた方がよいと言われていきます。

その点、ヤコブはしっかりしています。自分が死んだらどこに葬って欲しいか、きちんと自分の要望を遺言として息子たちに伝えております。そこまではよい。問題がひとつだけありました。ヤコブがここに葬って欲しいと言ったそのお墓は、かなり遠いところにある。ヤコブが死んだのはエジプトです。いっぽう、ヤコブが指定したお墓はカナンの地にあります。距離にして数百キロは離れています。今なら車や飛行機ですぐと言うでしょうが、当時は車などありません。移動するだけでも大変なことでした。

ちょっと冷めた言い方をすれば、ヤコブはとんだお荷物を息子たちに背負わせたことになります。もうちょっと近いところにしてくれたら。そうも言いたくなる。ヨセフだって政府の高官という地位にありますから、身ひとつで出掛けるわけには行かない。戦車と騎兵がくっついてくる。その費用は全部自分で出さなければならない。大変な出費になります。ヤコブがなぜそこまでカナンの地にあるお墓にこだわったのか、その理由を考えていきます。

福島のかたがたは、原発事故のことがあって、自分の故郷を追われ避難生活を強いられております。その人たちの多くが、先祖のお墓をどうするかで悩んでいるということを新聞記事で知りました。お墓が危険地域にあって参りが満足にできない。お寺では亡くなった方が出ても納骨ができない。生きている間は住み慣れた故郷から追われ、死んでか

らも葬る場所がない。そんなことが今起きてきているのだそうです。

新聞記事を読み、改めて日本では先祖の墓を大切にし、自分も死んだら先祖の墓に入ることを願う人が多いことを知らされました。

さて、ヤコブはどうであったか。13節。「その子らは彼をカナンの地に運び、マクペラの畑地のほら穴に彼を葬った。そこはアブラハムがヘテ人エフロンから私有の墓地とするために、畑地とともに買ったもので、マムレに面している。」

ヤコブが入りたいと願ったお墓は、ヤコブの祖父にあたるアブラハムが建てたものでした。代々、アブラハムの家族はこの墓に葬られてきた。ヤコブは、自分の先祖が眠る墓に入りたいと願いました。息子であるヨセフは父親の願いを大切にします。いろいろな負担は大きかったのですが、忠実に約束を果たしていきました。

このように見ると、ヤコブと福島の人たち、あるいは日本の文化と言っていていかもしいない、比べてみると結構似たようなことをしている。キリスト教と仏教は、思った以上に実は共通点があったのです。

3 アブラハムに与えられた約束

とは言え、ヤコブが先祖のお墓にこだわる理由ということになると、仏教とはなかり異なります。

このお墓は先ほど13節でも触れたように、ヤコブの先祖であるアブラハムが地元の人から買って手に入れたものです。アブラハムは、今はイラクと呼ばれる地域で生まれた人でしたが、あるとき神から、「わたしの示す地に行きなさい」との声を聞き、今のイスラエルと呼ばれる地に移り住みました。神はそ

の時アブラハムにこう約束したのです。「わたしは、あなたの滞在している地、すなわちカナンを、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは、彼らの神となる。」(創世記 17 章 8 節)

それで結果はどうなったか。アブラハムはカナンを自分のものにできたか。いいえ。自分の土地として手にできたのは、このお墓だけでした。すると神は約束を破ったのでしょうか。アブラハムの地上の生涯という短い時間で見ればそう見えます。けれども、神がご覧になっている時間は非常に長い。アブラハムが死んだ後の多くの子孫まで含んだ時間です。そこには当然、ヤコブも含まれ、ヨセフを初めとするヤコブの子供たちも含まれていきます。

ヤコブがカナンに地にあるお墓にこだわる理由がここにありま。神が約束してくださった場所だからです。私たちの目には、カナンをすべての土地が自分の所有になってはいません。ただ、マクペラの墓だけが自分のものとなりました。約束が破られたのではありません。神の約束が始まり、約束が成し遂げられていく途上にあるのです。これから後の時代に、必ず神の約束は完成されていきます。アブラハムもヤコブもそしてヨセフも、みなそう考え、カナンに地にある先祖のお墓にこだわり続けたま。した。

4 永遠のいのちを信じて

でもこの神の約束を聞いて、多くの方は疑問に思われるはず。です。「アブラハムは死んだ。ヤコブも死んだ。死んでしまったらみなおしまい。神は約束したかもしれないけれど、みな手遅れ。それでは意味がない。」

神はアブラハムになんと約束したでしょ

う。もう一度読みます。「あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。」

要約すれば、「アブラハムの永遠の所有として与える。」アブラハムは死にました。それなのにどうしてこんなことが言えるのか。答えはひとつです。神はアブラハムを死んだとは見ていません。からだは滅びましたが、もういちどよみがえると約束しているのです。アブラハムがよみがえるとき、彼の目はカナンをすべての自分のものとなっているのを見る、そう約束している。そしてこの約束は、アブラハムだけではない。イサクにもヤコブにもそしてヨセフを初めとする子供たち、孫たち、子孫たちにも及んでいく。そう言っているのです。

その子孫とはだれか。私たちです。神を信じる者であるのならすべての人々にこの約束は語られています。

他の宗教では、先祖の墓の前で手を合わせ、ただ亡くなった方のことを懐かしむことしかできません。しかし、私たちは違います。私たちは家族が亡くなれば墓に葬ります。でもそこで終わりではない。なぜなら、私たちの救い主であるイエス・キリストは十字架で死なれた後、三日目に墓からよみがえられたのです。イエス・キリストが、墓を絶望の場所から希望の場所に変えてくださいました。

皆さんの中には、先に自分の父親や母親、親戚、兄弟を送った方もいます。なかには息子や娘を天に送った方もいます。だれでも、愛する家族ともう一度元気な姿で会うことができるならと涙を流しながら願います。神はそんな私たちの願いを聞かれ、それは無理だと言われるのか。いいえ。私たちが死から取り戻すと言われます。神のひとり子イエ

ス・キリストが私たちの罪を背負われ十字架におつきになる。そこまでして、私たちを死から救おうとされています。

人間には最期にしなければならない仕事があると言われていました。「死ぬ」という作業を通じて、次の世代の人たちに私たちのうちにある信仰を手渡ししていく。それが私たちの大きな仕事になります。

信仰の大先輩たちは、この約束を信じて地上の生涯を全うしていきました。私たちは、この方たちから大切な宝と恵みをいただいていたことに気がつきます。

救いの主をともに信じて歩んでまいりたいと願わされます。